

## 新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（第2回） 意見概要

- 高等学校が三つのポリシーを作ることは必要。現状においても、高校入試や学校評価制度の中で、各高等学校は三つのポリシーに該当するようなものを作っているものの、バラバラで分かりにくいのではないかと。ポリシーの作成主体を学校とした場合、各学校が具体性かつ実効性のあるポリシーを作成することができるのかが気掛かり。
- 新しい時代の高等学校教育ということをつかむときに、入口と出口ということは意識しなければならない。
- 校長がリーダーシップを発揮することが重要。そのためには、校長に必要な資質を身に付けさせるとともに、校長がリーダーシップを発揮できるよう体制を変えていくことが必要。
- 「あの人だから問題」は、無くすのではなく、あの人だからできる、と言われるような人をたくさん作るべきという発想もある。
- 文系・理系という問題は、どの教科・科目等を学ばせるか（コンテンツベース）ではなく、どんな能力をどの程度育成するか（コンピテンシーベース）、といった視点から考えるべきである。現在の文系・理系の選択は、受験に有利なコンテンツを多く扱うことに重きが置かれているが、そこからどう脱していくかが課題。各学校は、市民として共通に必要なものを身に付けさせつつ、進路等に応じてより専門に即した形で高度化し、個々の生徒の資質・能力を最大限に生かすことができるような教育課程を、高校3年間を見通して描くことが重要である。今回の新学習指導要領でも、各教科等の指導を通して育成する3つの資質・能力を明確化し、各教科等の目標や内容を再整理されている。
- 高校の在り方は県教委が考えるものだと考えている人も多いが、高校は地域にとって大事な存在であり、地域も一緒に考えていくことが必要である。
- 普通科のカリキュラムを検討する際には、大学入試の準備期間を考慮に入れて、本来は3年間しっかりと行うべき教育プログラムを短くせざるを得ない状況にある。3年間しっかり学んだ実績を持って大学に行けるよう、大学入試を含めた高大連携の在り方に関する議論も深めていきたい。
- 定時制総合学科の高校であるが、一人一人特徴を持っている生徒が在籍しているため、一人一人がどれくらい力を付けて、どんな力を付けて巣立っていったのかを見るのは重要なことである。
- どのような人材を育成するかを考えるに当たっては、学校の中だけでなく、産業界や関係機関等がどんな人材を求めている、どんなニーズがあるのかを意識することも重要である。また、例えば福祉人材の育成に向けて介護福祉士等の資格を取れる環境を整備するなど、人材を育成する場面でも、教育の現場だけではなく、産業界や関係機関等との連携を行っていくことが必要である。

- 教育理念を具現化する方策として掲げられている、教育理念を様々な方針等にまとめるようなことは、実際には各都道府県で既に取り組んでいる部分があるという点に留意する必要がある。
- 三つのポリシーの策定プロセスにおいて、学校内の関係者が、地元市町村の首長部局や教育委員会、産業界、高等教育機関等と対話を行うことが重要。これが、ポリシー策定後に学校が社会と連携・協働して教育活動を行う鍵となる。また、学校と社会が生産的な対話を行えるよう、学校が社会とのコーディネート機能も併せもつ必要がある。
- 個別最適化の考え方は、児童生徒に最適の教材があるのに出来ないのなら当該児童生徒に問題があるという自己責任論につながりかねない。教材に取り組むこと自体に困難を抱えている児童生徒が互いに支え合う関係を大事にする視点が必要である。
- 高校生活への満足度や学習意欲が低い、学習時間が少ないといったことには、将来に希望が持っていないということもあるのではないか。
- 高校2年生次以降には特定の教科について十分に学習しない例として、進学校で卒業に必要な単位は十分に取れている高校3年生が、卒業するまでの残りの1年間は、予備校で勉強をして、受験に必要な勉強を学校でしたくないという理由で、通信制高校に転学してきた生徒がいた。彼らの価値観をどこで育てるかといえば、高等学校の中で育てていくことが必要だろう。
- 一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識していくためには、生徒一人一人の主体的な学びの履歴を作っていくことが重要なのではないか。どんな学びを幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校と積み上げてきたのか、さらには大学入試、あるいは高卒で社会に出る場合においても、大学や企業が受け取っていくような社会の仕組みを作っていくことが重要なのではないか。
- 高校生が自分たちの学びに自信がなかったり、学ぶ意欲がなかったりするということには、高校時代が何かの通過点というような捉え方しか彼らができていないからなのではないか。学校と家との往復で学校生活を終わらせるのではなく、もっと外に開いて、子供たちを色々な場面に置いてあげて、たくさんの評価軸を持たせてあげることが、彼らが自分の成長を自分で感じられる部分にもつながるのではないか。